

# 平成二年の『おくのほそ道』紀行 — 暑湿の労 —

横 山 邦 治

一

元禄二年の旧暦六月六日、月山山頂近くの角兵衛小屋に  
ビバークした芭蕉一行は、翌朝「雲晴テ来光ナシ。夕ニハ  
東ニ、旦ニハ西ニ有由也。」ということ、湯殿へ趣。  
のである。彼らは月山と湯殿の間を昼時分までに往復し、  
「及暮、南谷ニ帰。」っている、平成元年の私も文教の  
キャラバン隊は、月山登山までは芭蕉の御跡を慕ったので  
あるが、湯殿までの難路の往復はあきらめたのであった。  
時間的制約もあったのであるが、体力的にも皆々自信がな  
かったからである。

平成二年の文教の『おくのほそ道』行脚の目標には、ま  
ず湯殿山参詣があつて、そして芭蕉が「暑湿の労」と言っ  
て筆を省略した越後の国の縦断行があつた。

二

昨夏、平成元年の『おくのほそ道』の擬似行脚が、鶴岡  
を終点としていたので、今年の旅は象潟から南下して黒部  
川までという目標を樹てる。この象潟へ出来るだけ安直  
に、出来るだけ早く到着する行程を考えていたら、昨今夜  
行便で安直、安全という評判の広島から東京への高速バス  
直行便の利用を思い付く。早朝に東京に着いて上越新幹線  
で新潟へ、そして羽越本線の特急で北上すれば昼過ぎには  
象潟に着くのである。少々疲れるかも知れないなど言いな  
がら、中国・名神・東名の高速道を通る高速バスを利用す  
ることにする、新しいものの好きの精神のなせる業である。

平成二年の九月二日（日曜）、夕刻十九時十八分広島バ  
スセンター発の高速バスに文教娘子軍と老兵一人の御一行

様乗り込んだのであるが、JRの列車と勝手が違うのは、自由な梯団オシャベリのできないことである。ラクラクの一人席で手足を十分に伸ばせるわけではあるが、アチラの席、コチラの席と移動しながら食べたり飲んだりダベッタリの楽しみは制限されるのがバス内の常で、早速に寝支度にかからなくてはならないのである。それでも結構カルイざわめきはあったけれども、高速バスの律動的な震動は睡眠薬代りとなって、十数時間の他人まかせの時間が流れていく、薄曇りで早朝の富士の姿を見ることが出来なかった。高速バス中から見られる富士の姿、車窓に刻々と異なる姿を見せながら移り行く富士の姿は限りなく美しいのだが、無情な雲はそれを見せてくれない。

九月三日の早朝午前七時、東京駅の八重洲南口バス停に到着、その足で直ちに上野駅に向い、軽い朝食をすませてあさひ三〇三号に乗車、新潟到着は瞬時の間である。新潟十時九分発の特急いなほ五号で象潟に向う。十三時五十四分には象潟駅に到着、JRの時刻表は極めて正確である。駅前の大衆食堂で少し遅目の昼食をとって少々仰々しい荷物を店先に置かせてもらって、象潟観光である。

駅前北側の空地に芭蕉文学碑があつて、昭和四十七年六月十六日建立とある。『蚶満寺の芭蕉真筆の忠実な写し一軸を模写』（『きさかた』象潟町観光ガイドブック）したという少々厄介な由緒ある象潟三詠が刻されている。蚶満

寺では御真筆と称されいるらしくパンフレット類では拝察されて、行きずりの旅人には拝観は許されないようである。ともかく蚶満寺を目指して国道七号線を北上し始めると、右手に曲る道があつて何かありそうなので脇道する。

大正か昭和初年か知らないけれど、相当に古色のある公会堂の前に芭蕉の象潟での足跡が曾良の随行日記をもとに記した大看板の真新しいのがあつて、象潟町の観光開発の意気込みが感じられる。その前あたりの民家が『佐々木孫左衛門尋テ休。衣類借りテ濡衣干ス。ウドン喰、所ノ祭二付テ女客有二因テ、向屋ヲ借りテ宿ス。』と言う『向屋』の跡という、関幸一郎氏宅である。女客があつたので宿を移つたというのであるから、小さな旅人宿であつたのであろう。再び国道七号線に出るまでしばらく旧街道らしき様子を求めてウロウロするが、どの民家も今様にこざっぱりと改築されて昔自の悌はうかがえない。人間が毎日生活しているのであるから、まして木造家屋という日本民家の宿命で三百年前の悌を求めても土台無理な話である。それにしても東北地方の民家の変貌はこの数年殊に激しいような印象がある、日本が経済大国になった余波とすれば、そこに住む人々にとっては幸せなことであるが、日本全国が同じようなマイホームになってしまうのは何とも味気ないと考へるのは旅人の我ままと言うべきであらう。

象潟川という小さな川を渡って北上し、右手の松林に

向って羽越本線の線路を越えると皇宮山蚶満寺である。建立年月は何時か知らないけれど、ずい分立派な彫刻のある山門の前の人影少ない露店先で一息入れて寺内に。“拝観のしおり”によれば、“一、象潟九十九島の跡”から“一、しんらん聖人の腰かけの石”まで十六ヶ所の見所が挙げてあり、展覧会式に巡回すればよいようになっている。芭蕉関連で申せば“一、西行法師歌桜の跡”と“一、芭蕉の句碑”であろうか、それより人家のせまる九十九島の点在する田園のかたに秀麗な姿を見せる鳥海山の眺めが素晴らしい。文化元年の地震で眼前の田園が海の入江であった象潟の景は消失したのであるが、鳥海山の今の姿は芭蕉も眺めたはずである。吹浦に宿した十五日、塩越の向屋に借宿した十六日も雨降りで、“皇宮山蚶満寺へ行。道々眺望”という十七日も朝は小雨というのであるから、鳥海山は姿を見せなかったのではないか。それが十八日になると“快晴。早朝、橋迄行、鳥海山の晴嵐<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>。”というのであるから、酒田に帰る当日になって鳥海山を見ることができたのである。芭蕉は千満珠寺の方丈に座しての観望のごとくに説く、“この寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に尽きて、南に鳥海、天をささへ、その影映りて江にあり”と記す今に言う富士五湖の富士の倒影のごとくに、鳥海山の倒影が象潟の海面に映じたというのである。海変じて田園となっているのであるから、田毎の月のごとくには

鳥海の倒影を今は見るを得ない。芭蕉の述べた“影映りて江にあり”は、十八日の“アイ風吹<sup>テ</sup>山海快。”という随行日記の記述からは、鳥海の倒影は事実であった可能性が高いように思われる、散文的に申せば方丈からの眺望であったはずはなく、『おくのほそ道』の叙述は絵空事ということとなるのであるが。

二十数年前になろうか、本荘市で日本近世文学会があり文学散歩というので蚶満寺を訪問した時は、方丈に紹じ入れられて旧蔵の書画を拝観させていただき、縁側から鳥海山の眺望を楽しんだのであるが、心の持ちようの違いかも知れないが当時の方が人家少くはるかにのびやかな景色だったように記憶する、今は一介の観光に立ち寄った旅人であつてみれば鳥海山の威容を再確認するに心足りて帰路につく。門前を出れば羽越本線の線路、元禄の昔は象潟の入江であつたであろうところを線路と国道がはしっているのである。桑田変じて滄海になるの逆現象であるが、国道をとって返せば何とも埃っぽい桑田であつた。

十七時のJRで酒田に向う、随行日記にいう“女鹿。是が難所、馬足不通”という鳥海山嶺の迫る海岸線の難所も吹浦も一瀉千里、それでも五十分ばかり車中で酒田に到着である。鳥海山の溶岩が海中に落ち込んで、海波の浸食作用で形成された三崎（観音崎、大師崎、不動崎の三崎を合わせて呼ぶという）公園から小砂川海岸にかけては、車中

から眺めても人跡稀で交通の難所であったことがうかがえる眺めであった。秋田と山形の県境にふさわしい感じのところ、人の交流もここで中断されて然るべきであったのであろう。

酒田は大都会である、かつてのNHKの朝ドラで国民的英雄となったおしんの最初の奉公先のあった都会である。タクシーで市役所の裏通りにある若葉旅館直行である、玄関を入るとおしんのロケ隊が長期合宿した旅館であることを証するロケ写真がイヤでも目に飛び込んでくる。おしんさんに興がないでもないが、三百年前芭蕉が訪れた酒田の街がいかに変貌しているか実見すべく、夕景の市中に飛び出す。まずは日本海に沈む夕日を拝すべく日和山公園に向う途次、忠海上人、円明海上人の二体の即身仏を安置するという海向寺があり、孃子軍はこわいもの見たさに是非というので参拝する。忠海上人は宝暦五年二月二十一日入寂、月明海上人は文政五年五月八日入寂というのであるから、芭蕉様はとんと御存知ない信仰の在り様である。湯殿山仙人沢に籠って即身仏になられたというのであるが、芭蕉が羽黒三山を訪れた頃の信仰とどのようなかわりがあるのだろうか。

日和山公園の高台に出る、夕涼みがてら町の人々が散策する場であるようである。眼下に日和山六角灯台（酒田港へ夜間航行する船舶の目標に、明治二八年対岸宮野浦最上

川河口に木造六角の灯台が建てられ、石油ランプで光を放っていた。大正八年アセチレンガスにかわり、大正十二年北岸大浜に移転されたが、昭和三年高砂砂丘高台に近代的な灯台が設置され、この木造灯台は廃止となった。同年日和山公園に記念物として移設された。日本最古の木造灯台と称される。『日和山公園のパンフ』が白亜の美しい姿を浮きあがらせた前方に最上川の河口、左方一杯に当日はおだやかな日本海が広がり、最上川河口の向うには広やかな庄内平野が一望される。本間様と庄内藩を支えた肥沃な庄内平野の彼方に、鳥海山から月山に至る山並が北から南一面に高く低くはるかに見渡される。日没寸前、快晴で海の向うに雲が浮かぶだけの雄大な景を芭蕉はどのように眺めたのか。随行日記によれば、十三日の夕景に酒田に到着してから象潟での三日間をいれて廿五日出立するまでの十二日間、その間「快晴」と記す日が四日もあるのであるから、今の日和山公園の高台からの展望と類似の展望を感銘した可能性は大である。『おくのほそ道』では酒田の街を語るに寡黙である、芭蕉の目が鎧屋の繁昌ぶりを活写した西鶴の目とは異なるからでもあるが、次の松島の景と併称して説かねばならない象潟の景を美辞麗句で縷説するに気持が奪われたからでもあったろう。ただ私たちの前には、曾良の俳諧書留に「九月十五日、寺島彦助亭二而」と前書のある。

## 暑き日を海に入れたり最上川

という句が残されている。随行日記には「十四日 寺島彦助亭へ被招。俳有。夜ニ入帰ル。暑甚シ。」とあるので、十四日の句案であろう、しかも初案らしきは、「涼しさや海に入たる最上川」とある。これは彦助亭における俳席で、亭主に対する挨拶として暑熱の候における最上川河口における涼しさを詠じたのであろう。最上川は元合海から狩川まで船下りをしており、芭蕉自身「水みなぎって舟危し」と一寸オーバーな表現ながら船上の涼しさは十分に体験していたはずであり、鶴岡からも「十三日 川船ニテ坂田ニ趣。船ノ上七里也。」と随行日記に記するように、船で酒田に向っている。鶴岡からは現在の大泉橋の川べりから川舟に乗って、鶴岡の大泉川を下り、赤川を経て最上川に出る。（長田貞雄・松尾芭蕉自筆「あふみや唱和懷紙」に就いて『方寸』第八号所載）のである。最上川河口の景、舟上の涼しさを満喫して、次の日早速に彦助亭の俳席に臨むのである。まして、「船中少シ雨降テ止。」というのであるから、芭蕉の原体験がそのまま挨拶の意を表する句作りになったのである。その句作りが、『おくのほそ道』では、「暑き日を海に入れたり」と変化して定着するのである。彦助亭で「涼しさや」の句作りした後、芭蕉は象鴻に往き酒田に又帰って十九日から廿五日まで滞在している。『おくのほそ道』での記述は少いが結構長逗留なのであ

る。富裕で文化程度の高い酒田の街とて、芭蕉にとって居心地がよかったに違いない。その間、十九日は「快晴」、廿日も「快晴」、廿一日も「快晴」であるが「夕方曇。夜ニ入。村雨シテ止。」、廿二日は「曇。夕方晴。」、廿三日も「晴」、廿四日は「朝晴。夕ヨリ夜半迄雨降ル。」という具合で、快晴で正に「暑き日」の連続であったと思われる、この地方特有のフェーン現象というのもあったのではないか。十四日に「暑甚シ」とある象鴻で「雨強、甚濡」とあるなどから、今いうフェーン現象の暑さを指しているかも知れないのである。ともあれ随行日記では、この間の曾良自身の行動について、師の行動について、極めて寡黙という外はない。十九日から廿一日まで「三吟」が続いているけれども、それだけでなく「暑き日」が彼らの行動を制限していたかも知れないと思う。しかし涼を求めての夕刻、公園こそ当時はないけれど、産土の神を祭る日枝神社のある日和山への散策に誘われなかったとは言えまい。私どもが今見る最上川河口から日本海、そして庄内平野を一望する落日の景を、芭蕉自身が展望した可能性は高いように思うのである。

「暑き日」は、「暑き一日」であるとの解が一般である。「暑き日」を「暑き落日の太陽」と解するのは僻説のごとくである。角川文庫の発句評釈に「芭蕉当時の句としては、そうした見かたや考えかたはふさわしくないと思

う。”とある、俳諧の専家の説である。とは説きながら本文評釈で“赤い夕日が海に沈もうとしている。”という実景を前説に入れて解し、評釈でも前提のごとく説きながら“その実景をこの句の解釈に思い浮かべるのは少しもさしつかえない。”と言いつ添えてもいるのである。

最上川の河口で川舟を降り、翌日彦助亭で“涼しさや”の発句を詠み、象潟に往復してから、“暑き日”の酒田に数日滞在、実証不能ながら日和山から日本海に沈む“暑き太陽”を見、長い旅を終えた後で『おくのほそ道』を叙すときに発句を再検討する、“涼しさや”を“暑き日”と訂し、“入たる”を“入れたり”と修正する、この芭蕉の軌跡を辿るとき何が私どもの脳裏に浮かぶであろうか。

芭蕉の最上川を題材とする発句は、大石田での句も、酒田での句も、ともに俳席における発句であり、“涼しさ”という言葉も共通し、それがともに改められて“早し”となり“暑き日”となっている。“早し”への転移は、主人への挨拶としての“涼し”が、本合海からの最上川下りの体感によって実感的表現の“早し”に改められたと諸説一致するところである。“涼し”を挨拶というが、恐らく対人的こまやかな対応を心していたに違いない芭蕉にとって、大石田高野平右衛門亭における俳席では、もっとも実感的な言葉であつたろう。それが最上川下りの体感によって変化し、『おくのほそ道』での“早し”という語による

定着となったのである。“暑き日”への転移も、大石田における句の転移と同じ軌跡を想定して可なのではないか、俳席での実感的挨拶が、数日の酒田での生活の実感が、日和山からの落日の遠望が、“暑き日”への転移を生んだと考えたいのである。“暑き日”に、落日の太陽を思い描きたいのである。“入れたり”と連体形から終止形に転移させたのは何を意味するであろうか、曾良本では“入れたる”とあるので芭蕉の『おくのほそ道』における最終的意志がどこにあったか今一つ不分明であるが、連体形表現では“涼しさや海に入たる”が“最上川”を修飾しているのであつて、前半の語句を最上川がつつみ込む感じとなり、最上川に全ての焦点が集まるのに対して、終止形表現では“最上川”との間が切れて前半の語句と最上川とが独立して“暑き日”に焦点が移る、雄大な景を想定し得る力強さがここに生まれてくるようにも思うのである。

ここで僻説を主張するのではない、転移に至る芭蕉の軌跡を辿ることによって、挨拶を捨て去るに至った芭蕉の詩人としての体感を知りたいのである。そして私自身の体感と重ね合わせることが可能であるならば、“暑き日”への転移の中に、あの雄大な日和山からの展望が含まれており、落日の美しさと落日の後の涼しさの実感が含まれていると思いたいのである。そして“この句の鑑賞はますますたしかになってくる。”（角川文庫）のであつて、“しかし

「暑き日」の日は、やっぱり直接太陽を指したのではない。（角川文庫）との断定を見逃してしまいたい誘惑にかられるのである。とは申しまでも、この注的言辞を否定しうる何も用意していないのです。

日和山公園には「文学の散歩道」というのがあって、酒田を訪ねた文人墨客の文学碑が三十あまりあるようであるが、夕闇迫るころも近いので見廻ることなく市内に引き返す。海向寺あたりをウロウロしていると、大変立派な隨身門のある神社の前を通る、酒田の産土神を祭る下日枝神社で、天明八年に本間家三代光丘が献納した門という、本間様である。近くに光丘神社もあり、光丘文庫もあるという、これも本間様で、光丘は神と祭られているのである。酒田は地震とか大火とか災害の多い町である、昭和五十一年十月二十九日の酒田大火後の再建になるのであろうか、近代的に整備された中通り商店街（中町日和山通り商店街）を抜けて右折、キョトキョトしていると西鶴の活写によって元禄以前の繁昌ぶりが今に伝えられている鎧屋跡、一般に展示してあるのであるが、夕景という時間で人一人いない。門越しに不作法ながら首を伸ばしてのぞくと、ガラス戸が周囲をめぐらしているようである。近ごろまで時代の流れに合わせて改装してきた家のように（注二）、近時までそこに生活があったのであろう。

アチコチを小走りに見廻っている間に後に続いていた娘

子軍は見当らなくなる、鎧屋まできたので近くにあるはずの不玉亭跡を探すと、佐藤さんという屋敷地一杯に建物を建てている歯科医院がそうであるらしく、昭和三十五年六月十三日建立の小さな石碑がある。「淵庵不玉といふ医師の許を宿とす」とあるので、酒田という繁昌した港町であってみれば相当なお屋敷という先入観があったのであるが、現存する佐藤歯科医院の屋敷地だけが玄順宅の面積とすると、ごく普通の町屋というに過ぎない。加賀屋与助の名子であったというのであるから、借屋住まいの医師だったわけで、それにふさわしい町屋であったのであろう。芭蕉は、尾花沢で鈴木清風のお世話になったように、酒田三十六人衆のような豪商の家を宿にすることは出来なかったのであろうか。酒田を発つ時に見送りに来た人たちの中には、「近江屋三郎兵・加がや藤石」などという商人も記録されていて、豪商の中には俳諧好きの人もいたようであるが、宿としたのが借家住まいの玄順宅だったというのは、玄順が酒田における俳諧の中心人物であったからであろうか。ともあれ横丁ではあるが酒田の街の中心地で、各所歴訪の土地条件としては最適の場所と言えるけれども。

酒田市民会館や酒田市役所側を通り過ぎて若葉旅館に御帰館、娘子軍も三三五五御帰館である。この度の旅での最初の夜は、旅館らしい宿に泊ることである。

### 三

九月四日（火曜）の午前中は酒田市内の観光、観光パンフレットに従ってまず本間美術館、芭蕉の真桑瓜の懷紙を

拝して同じところにある庭園と別邸（本間家四代光道は文化十年（一八一三）に鳥海山を借景とした六千坪の庭園（鶴舞園）と建物（清遠閣）を建設し云々）とを拝見、次

いで街中の二番町にある本間家旧本邸へ（本間家本邸は三代光丘が庄内藩主酒井家のために幕府巡見使宿舎として明和五年（一七六八）新築し献上した建物で母屋桁行三三・

六畝、平家建、書院造り、棧瓦葺、二千石旗本屋敷の格式の長屋門構えの武家屋敷である。その直後酒井家から拝領し本宅として昭和二十年春まで居住していた。）に直行、私ごととき水呑百姓には大層なお屋敷だけれど、二千石旗本屋敷の格式と言えばお江戸には無数にあったわけだし、大名屋敷ということになればそれどころでなかったことは自明のこと、など申しながらも江戸中期の高級武家屋敷の遺構がそのまま現存するのは珍しいこととて隅々まで見て廻る。残り時間は少い、急いで庄内米歴史資料館に行く、広大な庄内米の集積倉庫群の一部を資料館としたもので、（明治二十六年、酒田米穀取引所の付属倉庫として、最上川と新井田川にはさまれた中洲（通称山居島）に建てられ

たのが始まりです。云々）というものである。江戸時代の昔から庄内地方の経済を支えたのが庄内米であることを実感する展示物であるが、そこにも大地主本間様の影響がうかがえ、酒田は本間様の町だなと思う。本間様台頭以前の芭蕉にとっては、縁なき名であったが。

酒田市郊外の飯森山文化公園の中に酒田市名誉市民第一号となった写真家土門拳の記念館があるという、若い人にとっては酒田の生んだ近代の代表的写真家の方に興があるようでは非見学したいというので、谷口吉生設計の美しい自然に調和した近代的建築である記念館に行く。執念の人である土門拳の芸術的香氣の高い写真が收藏、展示されている。鳥海山と庄内の水田地帯が広々と眺められる眺望は、最上川こそ見られないが日和山とは別趣の眺望が満喫出来て、記念館の立地条件の好適であることに惚れ込むことである。

昨夏、羽黒三山の羽黒山と月山に登拝したのであるが、月山から湯殿山への道は足弱のこととてあきらめて帰ったことであった。今年は是非ということで、土門拳記念館からは湯殿山直行、時間もなく交通の知識もないこととて湯殿山麓までタクシーで送ってもらい、帰りも結局鶴岡まで同じタクシーとなってしまふ。タクシーは田園地帯を走り抜け鶴岡郊外を南下する。羽黒山に行くにはこちらで西に向かわなくてはならないのであるが、朝日村に向けて走る、



参詣客相手と思われる相当規模のドライブインなどのある集落を抜ける山地、道路改装工事が進められていて完成しているところはスイスイ、未完成部分はウネウネ、全体的に完成に近いようで早晩快適なドライブ参詣が楽しめるだろう、国道二二号線で寒河江に抜ける道である。タクシーの車窓から右手に赤い旗が沢山はためいているのが見える、鉄門海上人と真如海上人の即身仏を祭る注連寺らしいが、今は御遠慮申し上げる。国道から別れて急坂を少し登ると広場に出る、恐らく信者の宿泊施設を兼ねているであろう新築の社務所めいた建物があり、土産物売る店が並んでいる。タクシーはここまで、しかしここから小さなバスが定期的に参加客を乗せて神社近くまで往復している、当然のこと便乗して麓まで。バスの終点から少し峻しい石ころだらけの山道を上へ下へと登っていくと、谷間に神社なのであろう粗末な板囲いをしてあるところが見えてくる。芭蕉は「總じてこの山中の微細、行者の法式として他言することを禁ず。」という、曾良も参詣に至るまでは詳述するが、御神体には及ばない、諸書同一の記述あって江戸時代のタブーの厳しさを教えるが、現在は御神体が観光用パンフにも写されていることとて、このタブーは解禁なのであろう。谷川のほとりにある小屋で履物を脱いで荷物など邪魔ものを全部置いておく、手足を清めついでに吹き出す汗を拭う、小雨模様で空気もひんやりしているのであ

るが山道を少し登ってきたので息が荒い。汗を拭ってホッとするのは法式に違うのかも知れないが、ヤレヤレと一息である。板囲いの中に入っていくとお祓いを受ける、小さな人形をした切紙の形代で身を清めて形代を水に流す、板囲いを通り抜けると御神体の前に出る。神殿は何もない、お札などを売る小さな社務所があるだけで、巨大な赤褐色の巖石が鎮座するのみである。その巨巖の全面に熱湯があふれんばかりに流れ下っている、巨巖が熱湯を噴出しているのである、不思議な感動を呼ぶ光景である。湯を口に含んでみる、一寸舌先を刺戟する苦く塩からい味がする、酸化鉄の成分がこの不思議な赤褐色の巨巖を創成しているのであらう。巨巖を拝して、巨巖の左傍の自然に出来た段を昇る、湯が素足の下を流れる、熱い、熱いけれど自然のよろこびが身を包む。信仰の形が、いろいろな形式で巨巖の周囲にめぐらされている。お賽銭があちこちに置いてある、

湯殿山銭ふむ道の泪かな 曾良

の句が生きてくる。『菅菰抄』に「この山中の法にて、地へ落ちたるものを取るあたはず。故に道者の投擲せし金銭は小石のごとく、銭は土砂にひとし。人その上を往来す。」とあって、月山から湯殿山に至る山道にお賽銭があつて、それを踏んで往来するのかと思っていたけれど、お江戸の昔しとて山道に銭を投擲する人としてあるはずもな

く、この巨巖に捧げるお賽銭を踏むことを表現したのではなかったか。神秘的な巨巖を拝して「泪かな」という感動もあったろう、『陸奥衛』の「三山雅集」にある

#### 銭踏で世を忘れけり奥の院

の句の「奥の院」は、この巨巖の存する場を示すのである。うし、ともあれ曾良の句に見える「銭」は巨巖の周辺に散乱するお賽銭を指すのではなかったろうか。

巨巖を這い登って深い谷間を望み見る、湯気が谷川に舞って不思議な景観である。今の人だったら温泉街の建設を考えたであろうが、古代の人はこの景観に神々の降臨を信じたのであろう。自然現象に対する畏敬の念から発するのであろう山岳信仰には、日本人の自然観の原形があるのかも知れない。芭蕉も『おくのほそ道』で「霊山霊地の験効、人貴びかつ恐る。繁栄長にして、めでたき御山と謂つつべし。」という、「恐る」べき出羽三山であり、「めでたき御山」であったのである。芭蕉にあって「めでたき」と評した神社仏閣はあまりなさそうである、少くも『おくのほそ道』には見当らないようである。「めでたき」という最高の褒詞の中に、芭蕉自身の山岳信仰に対する深い共感を汲み取るべきであろう。

『おくのほそ道』の出羽三山の記述で芭蕉が一番意を用いているのは、月山から湯殿山への行程である。エゾタカネサクラか何かの花が咲いているのを見て、行尊僧正の金

葉集所載の「大峰にて思ひもかけず桜の花の咲きたりけるを見て もろともにあはれと思へ山さくら花より外に知る人もなし」を想起し「猶哀も増りて覚ゆ」（曾良本）という芭蕉特有の発想に基く表現が見られるのも、月山と湯殿山の路程であった。その路程を体験することは今回も出来ない、鍛冶小屋から月光坂などという難所があるようで、今や私のごとき足弱にはこの路程を体験するのは不可能のようである、このあたりでエゾタカネサクラを見たのかなと思うことも出来ないのである。

坂道を下るのは早い、タクシーも早く下りるような錯覚があつて、谷間を抜けるとたちまち鶴岡の駅頭である。特急いなほ十号の発車まで二時間あまりの余裕がある、各自で自由に鶴岡市内の探訪をすることにする。芭蕉遺跡としては長山重行宅跡と芭蕉が酒田に向った川舟に乗った内川の舟着場跡とがあるけれど、昨年バスの車窓から大泉橋側の標柱を望見したこととて、鶴岡城跡の諸施設を見学する。致道博物館に学生諸嬢を案内して、私は庄内藩の藩校である致道館を見学する。庄内文化財保存会作製のパンフによれば、庄内藩中興の名君とされる九代藩主酒井忠徳が、文化二年に開学したもので、寛政異学の禁の後に開学した藩校ではあるが、徂徠学を教学としている。現在地には十代藩主酒井忠器が文化十二年に移築したという、現在遺存しているのは当時の半分以下というが、聖廟や講堂な

ど国指定史跡として往時の姿を偲ばせてくれる。これだけの規模の藩校がこれほどに保存されているのは、岡山の開谷学校跡は別として珍重すべき遺構といふべきであろう。聖廟の祭器が致道博物館で見られたけれど、この聖廟で釈奠する時に荘厳してこそ似つかわしいようである。こうしたものが今に伝わる場所に庄内藩の風を感じるし、譜代大名の一つの典型を見る思いがある。

羽越本線を鶴岡から南下する、庄内平野の田園地帯を抜けて三瀬の駅を越えると海岸線に出る、庄内海岸県立自然公園とされている山の迫る海岸線である。『おくのほそ道』では

酒田のなごりを重ねて、北陸道の雲に望む。遙々の思  
い胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠  
の関を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の国市  
振の関に到る。この間九日、暑湿の勞に神を悩まし、病  
おこりて事をしるさず。

と記すところ、この長途の旅程については、何故か『暑湿の勞』にかこつけて記述を避けているのである。私どもは随行日記によってこの間の消息を知ることができる。廿六日の条、晴の日で今の羽前大山駅のある宿場を発って『大山は三瀬へ三里十六丁、三瀬は温海へ三里半。此内、小波渡・大波渡・瀉苔沢・辺三鬼かけ橋・立岩、色々ノ岩組景地有。』と景色ある海岸線を辿ったことを記す。『色々ノ岩組

景地』というのは、景勝の地であることを証する、日記の上欄に横書で『難所也』とあるので、街道としては困難なところであったのであろう。車窓から見れば、短かいトンネルをくぐりながらの通過であるから、山が海に迫って岩石の多い海岸線らしいと判るだけで、やはり歩いてみないと行脚とは言えないと思うことである。温海<sup>あつみ</sup>の町では特急も停車する、温泉街の風情は車窓から眺めただけでは判らないが、相当な家並みではある。出羽と越後の境にあった念珠関には、『ねずがせき』というJRの駅があるけれども特急は無視である。随行日記によれば、廿七日に温海を発った芭蕉主従はここで行動を共にしていない、『翁ハ馬ニテ直ニ鼠ヶ関被越。予ハ湯本ヘ立寄、見物シテ行。』というのである。芭蕉に極めて忠実な曾良であるが、『所勞故』（五月廿九日の条など）『病氣故』（七月廿三日の条など）と理由あって行動を共にしないこともあった。ところがここでは行動を共にしない理由が明示されていないのである。芭蕉と曾良の本源志向が異なっていたことを示すところと、ここは解すべきかも知れない、古きを求めて古関跡を尋ねる芭蕉と現世的快楽を思わせる泉源を尋ねる曾良と。お師匠さん、私はもう貴方の尚古趣味には付き合いませんよ、という曾良の本音がここにあるかも知れないのである。芭蕉は目的に向って直進し、曾良は泉源を尋ねて一寸脇道に入ったのである。『半道計ノ山ノ奥也』に

泉源はあった。その日は「及暮、中村宿<sup>ス</sup>」、廿八日に村上の城下町へ到着、「申ノ上刻ニ村上<sup>ニ</sup>着。宿借<sup>テ</sup>城中へ案内。喜兵・友兵来<sup>テ</sup>逢。彦左衛門<sup>ヲ</sup>同道<sup>ス</sup>。」とある。越後の国に入ってから朝日山地の山々が海に迫っていて笹川流れと呼ぶ奇岩怪石の海岸線である、車窓からもその様子は不十分ながら望見できる。途中で沖合に島影が見えてくる、さては佐渡島かと人に問うと、よほど晴れていないと見えるはずがないという、粟島という島であった。十七時五十九分に村上駅に着く、芭蕉たちも廿九日に立寄った海岸沿いの瀬波に行く。瀬波温泉街があって、このあたりの保養地のようなのである。瀬波グランドホテル・はぎのやという今様温泉ホテルに止宿。

#### 四

上杉家の宿老本荘越前守繁長が臥牛山舞鶴城を築き、戦国末期から江戸期にかけて歴代の城主が城下町として整備、芭蕉が訪れたところは榊原武部大輔政邦の治政で十五万石の城下、松平大和守直矩城主のとき寛文元年から五年の歳月をかけて三層の天守閣や本丸など新增築したのだが、寛文七年落雷によって天守焼失、芭蕉がお城に案内された時は天守閣は存在しなかったのである。その後多くの大名が移転封となり、幕末は内藤氏五万九十石の治政下にあ

り、戊辰戦争で佐幕派であったことで村上城は焼き払われたようである、当時年若い家老鳥居三十郎（明治二年切腹、二十九才）の決断で城下は決戦場とならず、村上の街は戦火から救われたという。

九月五日（水曜）、村上の城下町見学から本日の日程は始まる。それにしても、芭蕉たちは瀬波に何のために出かけたのであろうか、今は何の変哲もない温泉街である。歌枕もないようだし史跡というべきもないようで、「未ノ下剋、宿久左衛門同道<sup>ニ</sup>瀬波へ行。」と宿屋の主人らしき久左衛門が同道しているというのが特徴か。温泉が発見されたのは、石油採取目的の堀鑿で熱湯噴出した明治三十七年というから、芭蕉たちが湯治目的で訪れたのではないことだけは確かであろう。何があったのであろうか、日本海を眺望するとしても決していい立地条件ではないのである。

瀬波から村上市街への途次に村上堆朱工芸館がある、堆朱は村上の特産工芸品で、堆朱の工程が実見できるので立寄ってみる。伝統技芸の重さがある、城下町でこそその工芸品である。臥牛山麓に到着、村上城跡までは七曲りの坂を登らなくてはならないのでお城参上は諦め、山麓に並ぶ三の丸記念館（明治四十年村上銀行本店として建築した木造の建物）、若林邸（百五十石拝領の内藤家の家土若林家の遺構、国の重文指定、中級の武家屋敷として貴重）、村上市郷土資料館（俗称オシャギリ会館、羽黒神社祭礼に

曳き出されるシャギリを収蔵展示)など見学、市役所の前を通って地図をたよりに浄念寺への道をたどる。途中に一燈公云々の掲示がある、*「光栄寺へ同道。一燈公ノ御墓拝。」*とある一燈公で、*「帯刀公ハ百疋給」と見える筆頭家老榊原帯刀(二千二百石)の父良兼の法号、良兼は曾良の仕えた長島藩主松平良尚の三男という(角川文庫注)。*芭蕉たちは、曾良の縁で、*「宿借<sup>テ</sup>城中へ案内。」*ということになったのであろう。その墓所という光栄寺は現存しないようで、とにかく時間もないこととて浄念寺(*「七月朔日」*朝之内、泰叟院へ参詣。巳ノ尅、村上ヲ立。)と見える泰叟院のことという、歴代藩主の菩提寺となったところで、藩主が変わると寺号も変わることがあり、榊原家時代は泰叟寺と称していたようである。)へと急ぐ。昔の俤がいかにほどこ残っている小路を進んでいると、寺の並んだ通りに出る、最初の寺が浄念寺である。雪国の風土に合わせているのか土蔵造りで、外見は二階建て風の豪壮なお寺である。人影なく内部の拝観は不可能、寺域内をウロウロしていると、裏手の方に間部越前守詮房の御霊屋とお墓があるのを発見する。間部詮房は家宜・家継二代の將軍に仕え、新井白石とともに幕政を司った人、八代の吉宗が將軍になると解任されて高崎から村上へ移封、三年後の享保五年七月十六日、失意の内に村上城で卒している。五万石の大名墓としては、御霊屋など別にあつて豪華というべきなので

あろうか。手入れがしてなくて、何となく荒廃の気配がある、観光名所ともなり得ないからでもある。

村上駅までは相当な距離であるが、交通の便も判らないのでテクテク歩くこととする、城下町の雰囲気は何となく感じさせるくすんだ空気がただよっている。現在の高度成長経済からはいくらか取り残されているのであろう、駅前はずは今様である。特急白鳥で新潟まで、十二時八分着、駅弁買って越後線の普通列車に飛び乗り吉田まで、吉田で乗り換えてまた普通列車で出雲崎まで。新潟は無視して通過である。*「暑湿の勞」とて芭蕉も触れなかった路程*であるが、お江戸の昔のこととてヘリコプターで一足飛びというわけではなく、宿場から宿場へと辿っているのである。随行日記によれば、七月一日に村上を発つて、*「つる地村」*に宿し、二日には新潟に着いている、新潟では、*「一宿ト云、追込宿之外は不借。大工源七母、有情、借。甚持賞。」*という体験をする、最後は*「甚持賞ス」というけれども旅人として不安と不快感があつたであらう。三日は弥彦神社の門前町に着いて宿し、四日に雲崎に着いて宿している。三日、四日は「快晴」で、雲崎に着いた夜中から「雨強降」、翌五日は「朝迄雨降<sup>ル</sup>。辰ノ上刻止。出雲崎ヲ立。間もナク雨降<sup>ル</sup>。」という状態で、「小雨折々降<sup>ル</sup>」有様であつたようである。*

私ども平成のキャラバン隊は、ヘリならぬJRの列車で

十四時四十分に出雲崎に着く。昔の街道は海沿いにあつて、JRの出雲崎駅からは小さな山を一つ越えて海側に出なくてはならない。バスの回数も少いのでタクシーに乗って良寛記念館に行く、『おくのほそ道』の絶唱、

荒海や佐渡に横たふ天の河

の想が生まれたかとされる出雲崎であるが、今は良寛様の生地としての方が著名である。この小さな港のある宿場町が多くの人たちの注目を集めるのは、江戸時代こそ佐渡の金山との中継地として繁栄したことがあったとしても、それより良寛様という江戸末期稀有の詩人のドラマチックな生涯が、橘屋という名主の名跡を放棄して出奔したことから始まることからの強い印象を与え続けているからである。それに芭蕉の絶唱の生まれたところとなれば、日本詩歌史上の聖地ということになるのであろう、ともあれ良寛様というので小高い丘の上に建つ記念館に行く。良寛生誕二百年祭（昭和三十二年）の記念事業として発起、昭和四十年開館のこの記念館は、向いに良寛の母の生地、佐渡が島が、東に越後一の名山弥彦山、そして良寛が最も長く居住した五合庵のある国上山が一望できる、ここ虎岸が丘に建設された。”という、館内には良寛の遺墨数多く、良寛という人間そのものが即反映された書が人に迫ってくる、奔放で暖かい書である。広島からよくぞ若い娘が来てくれたと、ボランテアの説明係さんが熱弁で、これも私どもを

圧倒する。展示場から一步庭先に出ると、その展望が素晴らしい。新潟景勝百選の第一位当選の地というのも肯定できる眺めである。良寛に憑かれた相馬御風が、この景色に接して、私は思わず感嘆の声を発した― 荒海や佐渡に横たふ天の川　こう芭蕉のうたったのもここであればこそと思わずにはいられなかった。”（大愚良寛）と記したのも当然かと思う。眼下に出雲崎の小集落があつて眼前に広大な日本海、そしてあまりにも真近に佐渡が島が見えるのである。強雨であろうと雨模様であろうと、芭蕉は眼前に佐渡が島を見たのである。ここで天の河を見ようと見まいと、天の河が横流れであろうと縦流れであろうと、佐渡が島がこれほどに迫って見えるのなら、荒海やの句が生まれるのは当然である何となく納得する。眼前の日本海はおだやかである、荒海やではない。しかし強雨だった芭蕉宿泊の出雲崎は、荒海やであったに相違ない、庄内海岸から笹川流れを見てきた芭蕉にとって、日本海は荒海やであつて当然であつたであらう。そして目の前の佐渡が島なのである。

芭蕉はこの虎岸が丘から佐渡が島を望見したのではない、記念館の裏口から、細く段々のある坂道を宿場町へ降りていく、途中に相当な神社があつて降り立つと良寛堂の前である。芭蕉が宿泊したという大崎屋跡、銀河の序を刻した石碑などがある芭蕉園、俳諧伝灯塚のある妙福寺、良寛剃髪の寺という光照寺、代官所跡、獄門跡などなどある

が、良寛の生家橘屋の屋敷跡に大正十一年九月に竣工したという簡素な良寛堂からの佐渡が島の遠望が何とも表現のしようもないほどに心を洗ってくれる眺めである。ここでの眺望は、芭蕉も堪能したはずである。バスの時間まで相当あるが、何時ものようにあちらこちらとウロチョロ覗き見して歩くのはイヤになり、良寛堂の前に腰掛けて何時までも佐渡が島を見ていることである。

出雲崎駅を十七時三分発の鈍行で越後線・信越本線を経て、とっぷり暮れた直江津駅に着き、古川屋旅館に投宿である。柏崎を過ぎたところからか、佐渡が島が後方に見え始めて夕景の中にだんだん遠去かっていく。柏崎から直江津まではほとんど海岸線を信越本線が通っているが、村上から新潟を経て刈羽あたりまでは越後平野を縦断するのである。車窓の景は、はるかにはるかに向うに越後山脈の連山が霞んで見えるほかは、広く平坦な越後平野の農村のたたずまいである。広い、風景に変化がない、新潟県を縦断すると大変な長距離なのである。芭蕉主従は海岸線の北陸道を行脚したのであるが、担々たる道筋を歩いて（新潟で大工源七の注意「馬高<sup>ク</sup>無用之由、源七指図<sup>ニ</sup>而、歩行<sup>ス</sup>。」ということもあった。）特記すべき事項を感じないままに、「暑湿の勞」という遁辞で全てを表現しようとしたのかも知れない。

## 五

九月六日（木曜）、直江津から魚津までが、私どもの今日一日の日程である。この直江津までの芭蕉の行脚日程を随行日記でたどってみると、七月五日に出雲崎から柏崎まで来て、柏崎の富家である「天や弥惣兵衛」の許へ美濃の商人俳号低耳の「弥三良状届」で「宿ナド云付<sup>ルト</sup>トイヘバ」何かあって「不快シテ出<sup>ツ</sup>。」ということになる。低耳の紹介状が効を奏さなかったのであろうか、そして「道迄兩度人走テ止、不止シテ出。」と意地を張って、「申ノ下尅、至鉢崎。宿、たわらや六良兵衛。」と鉢崎の宿場に泊る。六日には鉢崎を立て「黒井ヨリスグニ浜ヲ通テ、今町へ渡<sup>ス</sup>。」今町というのは直江津である、今は高田と合併して上越市の直江津である。直江津でも芭蕉たちは当初不快な目にあっている、「聴信寺へ弥三状届。忌中ノ由ニテ強而不止、出。」ここでも低耳の紹介状が介在する。ところが「石井善次良聞<sup>テ</sup>人走<sup>ス</sup>。不帰。及再三、折節雨降出<sup>ル</sup>故、幸<sup>ト</sup>帰<sup>ル</sup>。」と一応和解で七日には「雨不止故、見合中<sup>ニ</sup>、聴信寺へ被招。再三辞<sup>ス</sup>。強招<sup>（マメ）</sup>ニク及暮。」となるが、六日の宿は古川市左衛門、七日の宿は佐藤元仙となる。八日は高田の城下町（越後少将忠輝六十万石の居城であったが、忠輝除封後は小藩に転落、芭蕉来往当時は稲葉丹後守

正通十万三千石の城下であった。)へ行き、ここでも「細川春庵ヨリ人遣シテ迎、連テ来ル。春庵へ不寄シテ、先、池田六左衛門ヲ尋。客有。寺ヲかり、休ム。又、春庵ヨリ状来ル。頓尋。発句有。俳初ル。宿六左衛門、子甚左衛門ヲ遺ス。謁。」とあって、細川春庵と池田六左衛門父子の間に何か綱引があつたような感じで、快適というわけではなかったようである。そして九日、十日と高田に滞在して、十一日に高田を発っている。高田を発つ時に「五智・居多拝。」している。

昨夜、直江津到着が夜になり、駅前の古川屋旅館に予定より遅く着いたというので、相当御年配のおかみさんに叱られたと学生諸嬢はビクビクしている。まあ何と権式ばつた宿屋さんだと思ったけれど、食事には十分意が尽してあるし、古い宿屋らしさが随所に感じられる雰囲気。そのおかみさんに直江津の名所はどこですかと聞いたたら、芭蕉の芭の字も出ないで「謙信公」と断乎たる口振り。御先祖様の古川市左衛門さんは芭蕉さんを宿したのにと再度問うと、聴信寺のことなど十分御承知の上で、「謙信公」と言われるのである。さて大変、本日の主目的は親不知子不知から市振なのである、直江津は聴信寺から五智・居多ぐらゐと考えており、他に計画はなかったのである。私自身、謙信公の領国は越後であり、春日山が本処地であることぐらゐは承知していたが、その春日山は県都新潟の近くであ

ろうぐらゐに錯覚していたのである。海音寺潮五郎の『天と地と』とをNHKの大河ドラマ放映中は愛読したはずなのに、何を見ていたことか。直江津には、越後の一宮という居多神社とか五智国分寺があるではないか、中世末期まで直江津は越後の政治経済の中心地であつたのである。安寿と厨子王の供養塔があつたり、居多ヶ浜に親鸞上人が上陸されたという伝承あつて国府別院があるなど、直江津の歴史を証する説話は多いのである。直江津の裏山は妙高、妙高高原を越えろとすぐ川中島である、謙信にとって妙高原は裏庭のごときもの、信玄の川中島進出には神経質になるのは当然のことと、川中島合戦の戦略的意義を妙に納得してしまう。芭蕉主従は全く謙信公に興味を示していない。当然『おくのほそ道』の諸注解にこの直江津の歴史的背景に触れていないので、私も何も何も気付かなかつたのである。謙信公だけでない、芭蕉は近世を生んだ織豊期の名将とか古戦場とかには、源平合戦ごろに郷愁にも似た強い執着を示すのに対比して、全く興味を合わせていないことは判っているのだけれど、現在の私どもにとっては謙信公は興ある対象である。JRの春日山駅からは遠くてタクシーもないなど言われて困ったけれど、回数は少いがバスがあるというので、直江津市街は朝早起きで六時ごろから探訪することにして早寝。

早朝、古川屋旅館前の大通りを北進して右折、三つ目の



小路を左折直進すると直江津局傍に出る、その町家の隅のトリア仏壇センターが芭蕉の宿泊した宿屋跡というが何もない。局の前は大通りで右折、一つ目の通りを左折して少し行くと聴信寺、土蔵造りであることは雪国特有と言えようが、小さなお寺でこれも芭蕉の芭の字もない。この道を北進すると日本海の海岸通りに出て、右手の公園めいたところに琴平神社が鎮座し、『文月や』の句碑が建っている。この金刀比羅さんは関川の改修工事で遷宮したらしい、この関川河口が芭蕉たちが舟着きしたところなのであろうが、改修工事で面目一新のようである。古川屋に引き返すのに、できるだけ表通りを歩いてみる、何か古い商人の街の風情が残存しているようである。

バスで春日山に向う、途中で国府別院前を通ったけれど、居多さんも五智さんも諦めたので、これも当然無視して春日山である。山麓に林泉寺がある、開創（明応六年）以来二回も大火に遭い、古い建築物は入口にある惣門だけのようなのである。惣門は春日山城の裏門であったのを元龜年中に謙信公が移築させたものと伝えられているようで、かや葺屋根の素朴な門構えである。大正年間再建の山門、昭和四十五年竣工の宝物館などなど、噴飯ものは角川映画の『天と地と』のロケーション用門構えが寄贈されていて墓地への入口の観のあることでした。春日山神社に参拝して、春日山城跡も検分してみたい、それには恐らく一日中

かかって足りないのではないか、一つの山全体が防壁という感じで、中世時の山城の面影をも残しているのだから。ともあれ謙信公のお墓だけはとだらだら道を登る。大正六年に上杉家十四代茂憲伯が大供養塔を建てているが、その前にカッチリと鎮座する墓は、五輪塔の変形というのか五つの石が重ねられた素朴豪宕と称すべきもので、春日山に来て初めて満足という感を抱かせるものであった。宝物館における貴重な遺品の保存状態の悪さなど、ここに来て何となく後悔にも似た想いを持っていたので、謙信公のお墓を拝して心落ち着いたのであった、そして春日山城跡の麓に立って山頂を望み、『再見春日山』と秘かに誓ったことである。春日山城跡は表側（東）と背後（西）との両面から望むと、それぞれ異なる印象を与えるようであり、それも再見して確かめたいものである。

春日山城跡前の街道は、旧加賀街道（北陸道）で直江津に向えば五智・居多に至るようであるから、芭蕉も五智・居多を拝してこの街道を辿って『名立ハ状不届、直二能生へ通、暮テ着。』とある名立（今の西頸城郡名立町）に向っているはずである。春日山は間違いなく望見したはずである、私どもが林泉寺からの帰路、直江津駅行のバスを待っているこのバス停あたりで一息ついていたかも知れないのである。芭蕉との同体験を願う私どもにとっては、春日山を望見して芭蕉の目にも同じ山影が映じたはずと思い込む

のも心打たれる想いなのだが、五智・居多を拝すると手間隙は同じことでありながら、近世人の芭蕉は謙信公を無視し、現代の凡俗たる私どもは謙信公に魅かれたのである。

近世人にとっての謙信公と現代人にとっての謙信公は、その美化の様相に時空による格差が生じているのであろう。時間がない、五智・居多を無視した凡俗の民は、直江津駅十時十七分発の列車に飛び乗り、親不知の駅に向う。

越後路の長途の旅は、風景の平坦なる故か、不快事が不思議と重なった故か（『おくのほそ道』によっても随行日記を見ても仙台藩領の松島から石巻あたり不愉快な目に遭っているが、これらは個人的な意味での不快感ではなく制度上での不便さであって、人間的には救われる思いを抱いている。越後路での不快感は個人的、人間的なものである）、それに多く低耳がかかわっているのが不思議であるが、芭蕉にとって心にこたえる不快感ではなかったか。直江津・高田における「饗」などという手の裏を返すような厚遇も、芭蕉の神経を逆なでしていたのかも知れない。「名立ハ状不届」というのも、もし低耳の状というのであれば、こりこりしての無視であったかも知れない。低耳への不快感も生じていたかも知れない。「暑湿の勞」という一ぺんの挨拶だけで過したけれど、親不知の天険からはまた詳述を始める。随行日記によれば、「能生へ通、暮テ着。」て宿をし、十二日には早川という川で転び「衣類濡、

川原暫干<sup>ヌ</sup>」という事件あり、糸魚川で休憩して「申ノ中冠、市振<sup>ニ</sup>着、宿。」とあって、親不知の難険については記述はない。『おくのほそ道』では「今日は親知らず・子知らず・犬戻り・駒返しなどいふ北国一の難所を越えて疲れはれば、」とあって、「難所」たることを強調している。

親不知駅下車して人家がほとんど見当たらないのに驚く、旧道と国道八号線と北陸自動車道とが交錯してはしっているのに、人家は全くない、駅前に売店もない。市振まで三里弱は歩いてもと考えていたが、旧道は駅前少しで八号線に合流、その国道を大型トラックがビュンビュン飛ばしているのを見ると、危険の方を先に感じてしまう。数人の若い人たちが歩き始めているが、身支度十分の姿を見ると尚更気後れする、期待していたバスも海水浴のある夏の間だけで、九月に入ると廃止という。結局糸魚川からタクシーを呼ぶこととなり、その間、東の方に少し行ったところに水上勉文学碑というのがあって行ってみる、『越後つづいし親不知』中の一節を刻す、ここで小さな人家を少し見かける、海を見る、広く荒い日本海である。

タクシーに乗れば人まかせ、外波の小集落を過ぎて風波の展望台、飛騨山脈の山塊が日本海に迫って断崖を造成している様子がよく判る、そして日本海の左前方の能登の連山がはるかに遠く霞んで見える。しばらく進むと親不知の天険、観光バス・自家用車による観光客が多い。明治十六

年に断崖を切り開いて開通した旧国道は、観光客用の散策道となっており、国道八号線はトンネルの中、難工事であったであろう切り崩した岩肌に「如砥如矢」の大文字を仰ぎ見ることができる。眼下はるかに日本海の荒波が押し寄せているのが見える、東尋坊の断崖ぐらいなら投身自殺も心理的に可能であろうが、親不知のこの絶壁の上に立てば足がすくんで命永らえる気になるかも知れない。その眼下の海辺を歩いたのである、危険この上なしであったろう。大日本地名辞書に「親不知 其地は峭岳乱峙、約一里、其下潮汐の衝に当り、道路屢没す、行人間を候うて走り過ぐ、若し風潮猝に至れば、避けて崑竇に入る、是時に方て歩武の遅速、倏死生為す、父子の親と雖、相知る能はず、此目ある所以なり、秋冬の交、朔風海を捲き、怒浪激盪すれば、往来通せず、盖北州第一の奇險也、此を過て村あり風浪と云ふ、次駅これを承く外浪と云ふ、皆山に倚て設く、由る所の孔道と高下懸絶す、宇多駅に至るも亦然り、盖瀕海の地、奔潮驟に到るときは害測る可らず、故に此の如し。（失名紀行）」とあって、この間の事情を伝えてくれる。

『おくのほそ道』のこの難所の地名の記述順が、順序正しく記述していないとの論がある、その順序を正すという文庫本の注によってもいろいろある、親不知、子不知が市振よりであるは一致するけれど、犬もどり、駒返し順序がまちまちなのである。角川文庫の「郷津より市振に至る

間の海岸の難所。東より犬戻り・駒返し・親知らず・子知らずの順で、『随行日記』によれば、犬戻りは七月十一日、駒返し以下は十二日に通過している。）へ講談社文庫・講談社学術文庫も同じ順序」というのが正しいのであるが（ということは、私どもは犬戻り、駒返し難所は実見していないのである。）古来の諸紀行などを参照する場合は芭蕉の順路を逆行していることが普通であることに注意しなくてはならないし、親知らずと子知らずの難所は別々に存在するのではなく、この天険から市振間の難所を総称とすべきなのである。そして芭蕉自身は地誌案内ではないので順路などということは考えず、表現効果をこそ考えたであろう。「北国」の天険として著名な「親不知子不知」をまず表現し、そしてあまり名を知られていないが命名の起源が興味そそられる「犬戻り・駒返し」を記したのである、名立から市振の間と言えれば他にも崩山とか鬼ヶ鼻とかいろいろな奇勝あって難所でもあるのである。

海岸線の奇勝を左手に見下しながら道をくだると街道の右側に巨大な松、「青海町文化財海道の松」である。ここから市振の宿場である。ここでタクシーに帰ってもらい、申し訳に市振駅まで歩くこととする、空腹だが我慢する。実は食事をするところはどこにでもあるだろうと高をくくっていたのだが、パン一つ売る店がないのである、親不知ではタクシーを待たせていたのでそれどころか、カン

ジュースを買い求めるぐらいのことである。

一本松の前は防波堤があつて、その前はゴロゴロ石の海岸線である。この海岸線は海に没して親不知子不知の天險まで続いており、昔の人はこのゴロゴロ石の道を進んだのであろう。海岸は白砂青松という概念はここでは通用しない、山が迫った海岸だから岩塊がくだけてこのような小石の海岸となつたのであろう。芭蕉様が遊女と同宿したという市振宿に着いたというので、海岸に足を踏み入れてしばらく休憩、子供心に帰って石を投げてみる。とても能登には届かないなど思いながら、芭蕉たちには難所を越えてきた安心感こそあつても、こうした遊び心を持つ余裕はなかったらうと思うことである。市振宿での遊女との出会いが虚構か事実かは今さら詮索するすべとてないけれど、同行の依頼を「不便」とは思いながら拒絶するのは、こうした辺地の旅をする人としてどうなのであろうか。芭蕉と曾良同行二人、二人の旅の恙無さこそまずは当面の緊急事であつたとは思ふことである。

弘法大師伝承のある弘法の井戸、長円寺の芭蕉句碑、芭蕉の宿という桔梗屋跡、市振小学校の関所跡などなど、旧街道沿いに説明板などあつて迷うこともなく見学できるが、この街道筋に人っ子一人通っていない。越後と越中の国境の関所と北陸道の宿駅という二つの機能を有した市振も、過疎の波は日本海の荒波以上に激しく襲われているの

であらう。国道八号線は、この旧街道とは関係なく小高いところを通り抜けているし、北陸本線は市振の街外れからトンネルを出ている、文明の波も市振の宿場を無視したのである。「この部落は大正六年と八年に大火があつて、ほとんど全滅したらしく、昔日の俤は見るすべもない。」(井本農一『おくのほそ道をたどる』)というのであるから、俗にいう踏んだり蹴ったり、妻籠のような観光資源も失なわれてしまつているのである。

旧街道を抜けて国道八号線に出て十分も歩けばJRの市振駅である。十五時五分の列車まで時間がある、特急は通過だから何とも気の長い話である。駅前の一軒家の店で聞くと少し歩けばドライブインのお店があるという、しかし何となく疲れていて歩き始めようという娘さんがいない、この店でパンやらジュースやら、カップウドンの娘さんもいて、腹ごしらえをすることである。このあたりは険峻の風はうかがえない、日本海が遠くに望めるだけである。

各駅停車のJRで魚津に着く、小川温泉でも宿をして、随行日記に見える境村・泊・入善など探訪すればと思つたけれど、このあたり予約不能というので金太郎温泉とか申す新興温泉で最後の夜を過すこととなる。魚津は、芭蕉が通過しただけの町、黒部川の源流が水源で水がおいしいところと、最後の教育の地として魚津の短大に赴任されたチャキチャキの江戸っ子学者池田弥三郎先生の言、駅

頭はその言が刻してあり清水がこんこんと湧き出ている。車窓から懸命に眺めた黒部川の豊かな水量がここに見られるのである、黒部川も車窓から見る限り治水工事が完了して、黒部四十八が瀬とかや、数知らぬ川を渡りて”という風情は、今はうかがうことも出来そうでない聞く。

“点と線”というが、点だけの『おくのほそ道』再見行脚也と、自然と苦笑が湧いてくることである。

## 六

九月七日（金曜）、魚津駅で解散、金太郎温泉ではカラオケもあったようで、皆さんリフレッシュしてそれぞれの目的地に向う、この度の研修旅行に参加した人は四年生の中原美智子、三年の幾田美佐子、沖田亜紀、尾崎友美、金川容子、北野睦、木村美希、楠木政美、桑嶋里枝、佐藤和子、中原美智子、山川美紀の諸嬢である。

金沢に所用あって途中下車、所用すませると、それこそ所用山積の広島に直行である。“暑湿の労”あって、所用の労あり、心せわしない越後縦断であった。

注一 佐藤三郎著『酒田の歴史』に次のようにある。“その後、

今日まで続き、土塀をめぐらした平屋造りで、昔ながら

の土間が裏まで続いている当時の問屋の姿をそのまま残している。建物は弘化二年（一八四五）の大火で焼失し、その後のものと思われるが、文化庁の調査ではそれ以前の形式で再建したもので、貴重な船問屋の唯一のものとして、昭和五十九年史蹟に国の重要文化財に指定された。昭和五十一年の大火では地続きの裏まで焼けたが、幸いに類焼をまぬがれた。市内では珍しいただ一軒の昔ながらの杉皮葺きの石屋根だが、風向きがよかったであろう。しかし、復興後は裏に新しく道路がとられ屋敷がせめられ、往年の倉も移し、おもかげは半減した。”